

第9回「泉大津市オリアム随筆賞」

【佳作】

姉手ずからの茶羽織

家森澄子・岡山県倉敷市

羽織れば身も心も温かく包んでくれる、私の花嫁衣装。

ピンクとブルーの毛糸で編んだモチーフをつなぎ合わせた茶羽織、肩にかければ、優しさも温もりを感じ姉への、追慕の念が募るのである。

昭和二十年戦争で父を失い、その六年後母が病死した。そのとき十七歳の姉、十三歳の私、九歳の弟の三人暮らしになった。一時は寂しくて母の後を追って逝こうかと、思ったことも何度かあった。

しかし、姉は違った、

「私たちには、両親がちゃんと残してくれている家屋敷もあり、田畑もあるわ、本家でお世話になりながら、頑張りましょう」

中学を卒業したばかりの姉は、四反余りの田畑を、叔父夫婦に手伝って貰いながら耕作していた。元々器用で体格もよく元気な姉は、教えられたことは直ぐ覚え、大人達と変わらないぐらい働いていた。それというのも両親はなく、自分たちはお世話になる身だから精一杯、無理を承知で私と弟のために頑張ってくれていたんだと思う。

そればかりでなく、母が生前していたミシンかけ、和裁、編み物に興味を持ち、小学高学年の頃から、これらを教わっていた。特に編み物には興味を持って口癖のように、

「ミシン掛けは決められた形通りになんかなくてはいけない、和裁も約束事に従って縫わなくては縫えない、しかし編み物は違う」

「どうしてなの」

「編み物は着る人の身体に合うように編む人がひと目ひと目の編み重ねで作れるの、私は編み物が大好き」

こう言っていた姉は母の死後、近所の人から頼まれる編み物を、農作業の合間にまた夜なべに編んでいた。謝礼として頂いたものは、学校からの旅行費用や、学用品購入に充ててくれた。手先が器用で何事にも熱心な姉は母から習っただけの、編み物の技術で生活にうるおいを持たせてくれた。

姉には二十歳を過ぎると、方々から縁談話が持ち込まれたが、その話には耳を傾けず、「私はまだ一人で、やりたいことがありますから」

と、自分の所為にして断り続けた。やがて私も中学を卒業し、進学は断念して、就職した。それから三年くらい経った頃、職場を通じて、ある人にめぐり会った。その人は私から見て優しく頼れる人に思えた。お付き合いしている内に、是非結婚して欲しいと言う

話があり、これを聞いた祖父母、親戚は猛反対でそのとき私十九歳、姉二十三歳の正月であつた。

「年頃の姉を差し置き、妹が先に嫁ぐことは順序が違う。常識ある人間のすることでない。絶対に許されん」

今までに見たことの無い祖父の憂患な顔だった。祖父のそんな顔を初めて見て、みんなに心配かけてはいけなないと、私も諦めようと決心した。しかし、私の心の揺れは日々の暮らしに表れていたのか見かねたように姉は、

「あなたが本当にその人が信頼でき、結婚して幸せになれると思うなら、幸せになることに姉、妹の順番はいらないと思うの」

涙の潤んだ姉の目は慈悲のこもった哀願にも思えた。でも、私が家を出れば一番苦勞を背負うのは姉である。しかし、自分が幸せになれば、姉を助けることもできる。十九歳の幼き私の脳はこう決めつけた。

「嫁ぐと言っても親戚は反対なんだから、私一人では、何の支度もしてあげられんよ」

「そんなことは、いいのよ。身体一つで行けばいいの」

その夜から姉は覚悟を決めたように、自分の一番お気の入りの毛糸のアンサンブルのセーターを解き始めた。その様子を見て、

「お姉ちゃん、それどうするん」

「毛糸って便利なの、何にでも編み直しがきくから、あなたの羽織るものを編むわ。新しいものを買ってあげられなくてご免ね」

昼の仕事を終え疲れた身体で凍える指先に息を吹きかけ、巧みに編み棒を動かしている。傍でじっと見ている私に、自信たっぷりに、

「編み物には編む人のそのときの気持ち、表れるのよ」

「どんな風に」

「心が乱れている時は編み目が締まるの、優しく着る相手を思いやって編んでいるときの編み目は、ふんわりといつまでも温かいよ」

この言葉を聞いた六十数年前、皆が寝静まり、村の灯が消えた節分前夜、十九年間生まれ育った家を後にした。

「身体に気をつけて、落ち着いたら住所だけは知らせて」

今もあの涙声と共に、愛を編み込んだ一枚のふんわりと温かい手ずからの茶羽織を、羽織らせてくれた肩の重みが忘れられない。

これが私の花嫁衣装であつた。